

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 21 日現在

機関番号：17601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22720139

研究課題名（和文） 楚簡による戦国文字資料の再検討—「伝抄古文」と「古璽」を中心に—

研究課題名（英文） A Comprehensive Restudy on the Chu 楚 Bamboo Manuscripts in the Zhang guo 戦国 Period - Centered on Reprinted Gu Wen 伝抄古文 and Ancient Seal 古璽

研究代表者

山元 宣宏 (YAMAMOTO NOBUHIRO)

宮崎大学・教育文化学部・講師

研究者番号：60571156

研究成果の概要（和文）：後漢時代の許慎『説文解字』叙には、秦の時代に8種類の書体、新の王莽の時には6種類の書体が存在したことを記述する。古文は王莽の時代に存在した6つの書体の一つとして取り上げられているのである。また古文の異体字として奇字という書体もあったという。

そこで、近年出土の著しい楚簡における研究成果を利用し、『説文解字』における古文と奇字の関係を捉えなおして、古文と奇字を区別した許慎の認識をとらえ、当時に於ける戦国文字の認識を再考した。

研究成果の概要（英文）：In the preface to his Shuowen jiezi 説文解字, Xu Shen 許慎 of the Eastern Han described that there were eight styles of handwriting in the time of 秦 and six kinds in the time of Wang Mang 王莽. During the period of Wang Mang 王莽, Gu Wen was one of the styles among the six chirographies. Furthermore, the variant form of Gu Wen is called Qi Zi.

Therefore, by using the research result of the recent excavated Chu Bamboo Manuscripts, I will clarify the relationship and distinguish the differences between Gu Wen and Qi Zi base on Xu Shen's understanding, as well as restudy the characters in the Zhangguo period.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学,文学論

キーワード：古文、奇字、説文解字、古璽

1. 研究開始当初の背景
『説文解字』叙によれば、新の王莽の時の

書体には、古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、鳥蟲書の六体があるという。私は、いままで

の研究で、これらの書体の名称は当時の古文学派の影響によって名づけられたことを明らかにした。

しかし『説文解字』には奇字が5例しか収録されていないが、王莽の時代に存在した6つの書体の一つとして取り上げられている事に対して、明確な結論を見いだせなかった。なぜ許慎は、たった5例しか収録しなかった文字を王莽の時に存在した書体の一つとして取り上げたのか疑問であったし、このことについて正面から論じた先著もない。それは、従来の研究では奇字について論証しようにも、そのための資料が乏しかったことによる。しかし近年、戦国楚地方における文字資料の出土が相次いでいる。これらの資料である楚簡は、従来の研究者が見ることの全くできなかった資料であり、『説文解字』における古文と奇字の関係を捉え直すことのできる絶好の資料と成りうるのである。

2. 研究の目的

今からおおよそ二千三百年前に書写された楚簡の発見によって、始皇帝の文字統一によって抹殺された「古文」の存在が確認できるようになった。しかし、これらの新出土文字資料とは別に、始皇帝による文字統一の迫害をくぐり抜けて、漢代以降の伝世文献の中にひそかに命脈を保ってきた「古文」が存在した。それらは写し伝えられた「古文」という意味から「伝抄古文」と称され、『説文解字』等の字書や石経などにその痕跡をとどめてきた。

これらの「伝抄古文」は依拠する資料の大半が散逸したために資料的な裏付けがとれないことや、青銅器に鑄込まれた文字である金文との間には文字の構成や書きぶりに相違点が多く存在したため、清朝以降において「伝抄古文」は素性の怪しい文字とみなされてきた。

ところが1970年代以降、楚簡をはじめとする戦国文字資料が相次いで発見されると、「伝抄古文」の中に戦国文字と合致する例が多数確認されるようになって、その資料的価値が再評価されるに至った。

つまり戦国文字資料の発見によって「伝抄古文」がまったくの偽造に出るものではなく、そのなかに漢代の古文家たちによって受け継がれてきた貴重な情報が残存していることが証明されたのである。そこで私は、ここ最近における楚簡研究の成果を利用して、『説文解字』収録の古文と奇字の関係を明らかにしたいと考えるに至った。

3. 研究の方法

「伝抄古文」は、その性格上、伝写の間に生じた誤写や訛変が数多く含まれている。

したがって利用にあたっては各種の資料

に見出される字形を相互に比較検討して原型を推定する、いわゆる資料批判の作業が不可欠である。この作業を行うことによって、これまで未開拓の分野である「伝抄古文」の研究が大きく進展することは言うまでもない。

新出土資料である楚簡と『伝抄古文字編』に収録された「伝抄古文」として伝わる字形を相互に比較検討して、「伝抄古文」の原型を推定する。そこで楚簡の文字と「伝抄古文」の比較を通じて、これまで未開拓の分野である「伝抄古文」の研究を進め、その全貌を明らかにする。

さらに「古文と奇字」による「正体と異体字」との関係性を楚簡の研究成果を利用して明確にすることを目指す。また、『説文』収録の古文だけでなく、従来伝えられてきた郭忠恕『汗簡』、夏煉『古文四声韻』等の字書の再評価にもつなげていくことを想定している。

また、近年出土の楚簡の研究成果や、楚簡の文字構成の変遷をたどることによって、ある時期に於ける楚系文字に特殊な文字構成が存在することが確認できる。そこで楚系文字の書き方の特徴を明確にして、古璽の中でも特に楚国の官璽における文字使用を調査して、楚国の官璽の断代研究を進める。

4. 研究成果

『説文解字』叙に基づけば、新の王莽の時の書体には、古文、奇字、篆書、隸書、繆篆、蟲書の六体があるという。これらの書体の名称は当時の古文学派の影響によるものであった。『説文解字』には奇字が5例しかみえないが、王莽の時代に存在した6つの書体の一つとして取り上げられているのである。

これらの書体の名称は出土した考古学的資料と比較すると実際には篆書と隸書の2種類に分類されていることが判明する。

そこで許慎における書体の認識を明確にしておく必要から、『説文解字』叙と『漢書』藝文志に記載される書体名の整理をおこなった。その成果を韓国 済州で開催された第4届 韓中日漢字文化国際論壇 漢字文化圏古代漢字文献資料之數字典建設和共享以及 東西方之漢字文化新談(Digital Archive and Data Sharing Service on Ancient Literatures Related to Chinese Characters in East Asia & Academic Inter-Communication between East and West)において発表した。

一方、古文学派としての許慎は、古文を重視したはずである。古文を考える上で無視できないのが近年出土のおびただしい楚簡である。そこで、近年出土の著しい楚簡における研究成果を利用し、『説文解字』における古文と奇字の関係を捉えなおして、古文と奇

字を区別した許慎の認識をとらえ、当時に於ける六国文字の認識を再考した。

また、楚系文字系列の古璽を取り上げて、文字構成の特殊な書きぶりを探り、古璽断代の一つの目安を打ち立てることをめざした。

楚簡の文字構成の変遷をたどることによって、ある時期に於ける楚系文字に特殊な文字構成が存在することを見いだした。

そこで楚系文字の書き方の特徴を明確にして、古璽の中でも特に楚国の官璽における文字使用を調査して、楚国の官璽の断代研究を進めた。

楚国の官璽は、印文中に多く「璽」字が含まれるが、その「璽」字は、みな「金」偏に従う「鉞」形に書かれる。印文中に「金」偏の書き方として特徴的なのは、点を連続して書く書き方が多く見られことである。

「金」偏の書き方を、西周から戦国後期まで調べてみれば、「金」偏の点の打ち方に変化が生じていることが判明する。この変化する以前を旧体、変化した字形を新体と仮に名づけるならば、「金」偏の旧体は、点を連続して書くことはないが、新体は点を連続して書くのである。

ここから「金」偏の点の書き方は、西周春秋時期はすべて点を連続させない書き方をしているのに対して、戦国中期から点を連続させる書き方が始まり、その後この書き方が主流となっていくことが理解できるのである。

この楚系文字の書き方の特徴を踏まえれば、印文中に「金」偏における点の書き方として、連続して書かれているものは、戦国楚国の璽印と断定できた。

古璽研究への新しい研究方向を明示できたが、いまだ全面的に楚系文字に特殊な文字構成と古璽を総合的に結びつけた研究には着手していない。そこで、さらに広範囲に個々の楚形文字を調査し、字形の特徴を抽出し、その成果を古璽と比較する。そして、古璽を体系的に断代していくことを目指すのが今後の課題である。

この地道な作業を根気よく行い、出来るだけ多くのデータを集めて、より精度の高い古璽の体系的な断代を目指したい。

さらに古璽の断代研究を進めることは、ほとんど進展のなかった古璽研究に新たな視点を提供することになる。

楚系文字に見られた特殊な字形とその字形の変化に注目するという視点は、今後の楚簡研究のみならず、戦国文字資料の分野で新しい研究を展開されることが期待される。

本研究は文字学の発展のみならず書法史を含めた文字文化研究にも一定の貢献をなし得ると確信する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 山元宣宏「篆書名義考」漢字研究 第7輯、慶星大學校 韓國漢字研究所、p 199-219、2012. 12、査読あり
- ② 山元宣宏「关于〈说文解字〉叙和〈汉书·艺文志〉所记载的书体名称」『中国文字研究』第十六輯 (华东师范大学中国文字研究与应用中心、p 134-142、2012年8月) 査読あり
- ③ 山元宣宏「蘊含在書體命名中的意圖-關於其成立與背景-」、『日本東方學』第二輯、北京、中華書局、P 67-90、2012年3月)、査読あり
- ④ 山元宣宏「關於《說文解字》叙和《漢書》藝文志所記載的書體名稱」『漢字研究』第5輯、慶星大學校 韓國漢字研究所、p 19-36、2011年12月25日、査読あり

[学会発表] (計 2 件)

- ①山元宣宏「篆書名義考」
第4届 韓中日漢字文化國際論壇
漢字文化圈古代漢字文獻資料之數字典藏建設和共享以及東西方之漢字文化新談
(Digital Archive and Data Sharing Service on Ancient Literatures Related to Chinese Characters in East Asia & Academic Inter-Communication between East and West)
2012年8月24日-27、韓國濟州大學

- ②山元宣宏「關於《說文解字》叙和《漢書》藝文志所記載的書體名稱 (关于《說文解字》叙和《汉书·艺文志》所记载的书体名称.)」
第3届 中日韓漢字文化國際論壇 -漢字語料庫標注暨紀念戴家祥先生誕辰105周年學術研討會
2011年8月27日-29日 上海 華東師範大學)

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山元 宣宏 (YAMAMOTO NOBUHIRO)
宮崎大学・教育文化学部・講師
研究者番号：60571156

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：